うごきゐし夜のしら雲の無くなりて高野の山に月てりわたる

いにしへにありし聖は青山を越えゆく彌陀にすがりましけり

みなみより音たてて來し疾きあめ大門外の砂をながせり

大正十四年比叡山で第二回安居會のあつたとき、そのかへりに高野山に遊んで出來た歌の中のものである。

しづかなる峠をのぼり來しときに月のひかりは八谷をてらす

しらじらと谿の奧處に砂ありて遊べる鳥は多からなくに

これも亦その年に出來た。今から見れば、遠い過去の氣持のものであるが、その中には短册などに書いた歌もあるので、近年作つた歌のやうにもおもはれるものがある。

おのづからゆらぎつつゐる紙帳のなかに疲れてものをこそおもへ

あまつ日の無くなることを悲しみて踊りし神代おもほゆるかも

むなしき空にくれなゐに立ちのぼる火炎のごとくわれ生きむとす

寺なかのともりししろき電燈に蟷螂飛べり羽をひろ

げて

かういふ歌をも私は昭和元年、昭和二年あたりに作つた。從來の歌といくらか違つてゐるので人目を牽いたものであつた。又歌中、『紙帳』の文字のあるのは、私が歸朝したのは、寒い時だつたので、信濃の友人が心配して私のためにこの『シチャウ』を惠んでくれたのであつた。それを私は『カミガヤ』と讀んで歌を作つたのであつた。

みちのくに雪解のみづのとどろくと告げこし友を我
はおもはむ

われひとり眼みひらく小夜ふけに近くをとほる兵の
足おと

さ夜ふけと春の夜ふけしひもじさに乳のあぶらを麵

麭にぬりつつ

とりよろふ青野を越えてあゆみつつ神死したりとい
ひし人はも

赤彦はいまごろ痛みふかからむ赤彦をしましねむら
せたまへ

この五首は、「山房の夜中」と題し、大正十五年四月號の改造に載つたものである。この歌集「ともしび」の編輯淸書は、ずつと以前（既に昭和四年ごろ）に出來てゐたのであるが、うつかりしてこの五首は脱落してゐた。それを山口茂吉君の厚意で補充することの出來たのは幸福であつた。

信濃路はあかつきのみち車前草も黄色になりて霜が
れにけり

寒水に幾千といふ鯉の子のひそむを見つつこころなごまむ

むかうより瀬のしらなみの激ちくる天龍川におりたちにけり

晝しぐれの音も寂しきことありて日ましに山は赤くなるべし

石原の湧きいでし湯に鯉飼へり小さき鯉はここに育たむ

さむざむと時雨は晴れて妙高の裾野をとほく紅葉うつろふ

私は昭和元年、昭和二年あたり信濃に旅し、また越後妙高山近くに行つて

歌を作つた中に、やや特殊なものがあり、當時人の注意をも牽いたので、ここに若干抄して置いた。

大き聖いましし山ゆながれくる水ゆたかにて心たぬしも

常ならぬものにもあるか月山のうへにけむりをあげて雪とくる見ゆ

わが父も母もなかりし頃よりぞ湯殿のやまに湯は湧きたまふ

一番めの歌は、昭和二年永平寺にてアララギ安居會を開いた時出來た歌で、たびたび短冊色紙などに書いたものである。第二第三の歌は昭和三年夏、山形縣三山參拜の時に作つた。一つは、月山の山上の雪解の景で、莊嚴雄大な

氣持である。一つは、吾々が祖先以來湯殿山を尊崇した氣持で、『湯はわきたまふ』の表現はそれに本づいて居る。

つらなめて目のまへを行く群集の心おどりをわれ旁看す

心こめし西洋の學の系統もすでにもの憂し秋の夜ごろは

もの冷ゆるころとはなりて朝々の薄明より鳥は群れ立つ

昭和三年には、こんな歌をも作つた。必ずしも歌壇と同行しなかつた歌といふことも出來るやうである。

納本

○

この歌集に「ともしび」と命名したのは、艱難暗澹たる生に、辛うじて『ともしび』をとぼして歩くといふやうな暗指でもあつただらうか。

○

本集發行に際し、岩波雄二郎、布川角左衛門、榎本順行、中島義勝諸氏に感謝の意をささげる。昭和二十四年初秋。齋藤茂吉。

納本

昭和二十五年一月三十日 第一刷發行
昭和二十五年八月十五日 第二刷發行

ともしび
定價參百五拾圓

著者 齋藤茂吉

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
發行者 岩波雄二郎

東京都西多摩郡霞村根ケ布三八五番地
印刷者 山田一雄

發行所 東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三 株式會社 岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

株式會社大化堂印刷・製本

齋藤茂吉著

歌集　つゆじも　B6判 三三四頁　定價 三三〇圓

歌集　遠遊　B6判 二七六頁　定價 二三〇圓

歌集　遍歷　B6判 三八四頁　定價 二〇〇圓

歌集　小園　B6判 三〇八頁　定價 三八〇圓

歌集　白き山　B6判 三三四頁　定價 三二〇圓

歌集　たかはら　B6判 二一六頁　定價 二〇〇圓

歌集　連山　B6判 二八二頁　近刊

岩波書店刊行